

令和7年 9月1日	農作物病虫害発生予報 9月	山口県病虫害防除所
--------------	--------------------------	-----------

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病虫害】	2
	【その他の病虫害】	12
III	参考(予報の見方、気象予報)	13

I 予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イネ	いもち病（穂いもち）	やや多	やや多	多
	紋枯病	平年並	平年並	前年並
	トビイロウンカ	少	少	少
	コブノメイガ	やや少	やや少	少
	斑点米カメムシ類	やや多	やや多	前年並
ダイズ	ハスモンヨトウ	やや少	少	少
	吸実性カメムシ類	やや多	やや多	前年並
カンキツ	かいよう病	多	多	多
	黒点病	平年並	平年並	前年並
	ミカンハダニ	少	少	少
果樹全般	カメムシ類	少	少	少
野菜全般	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	前年並

お問い合わせ

山口県農林総合技術センター(山口県病虫害防除所)

TEL (0835) 28-1211(代表)

FAX (0835) 38-4115

E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

Ⅱ 予報

イ ネ

1 いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	液剤：穂ばらみ後期と穂揃期の2回 粒剤・パック剤：出穂前

(2) 予報の根拠

ア 葉いもちの8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率19.6%（平年16.7%）、発病株率4.4%（平年5.8%）、発病度2.1（平年1.6）で平年並みであった（±）。

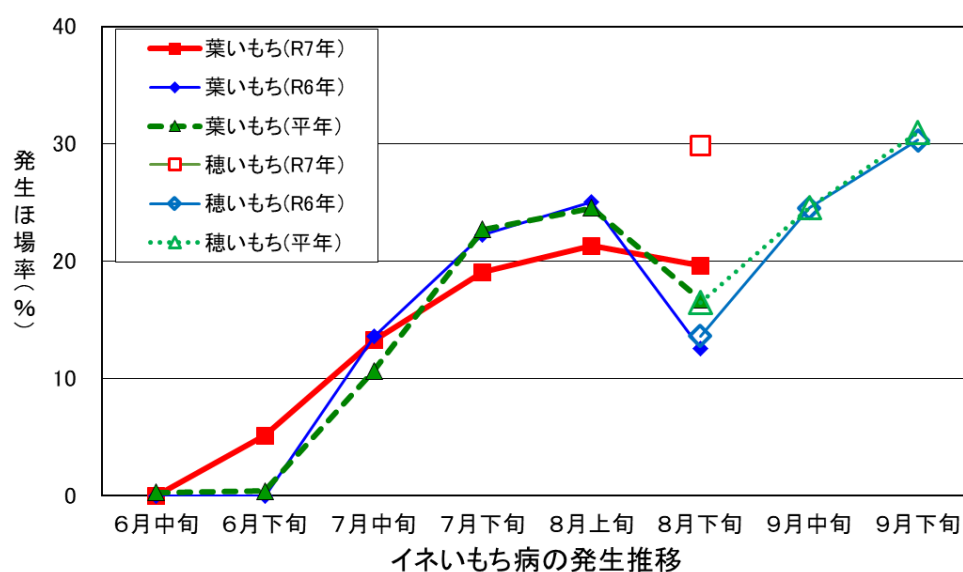
イ 穂いもちの8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率29.8%（平年16.5%）、発病株率5.2%（平年3.1%）、発病穂率0.9%（平年0.6%）発病度0.1（平年0.5）で平年に比べやや多かった（+）。

ウ 気象予報では、9月の気温は高い、降水量はほぼ平年並、日照時間は平年並か多い（±）。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

穂いもちの防除を適期に実施する。液剤は、穂ばらみ後期と穂揃期の2回行い、粒剤・パック剤は出穂前に施用する。防除後も発生が多い場合には追加防除を行う。



2 紋枯病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	—

(2) 予報の根拠

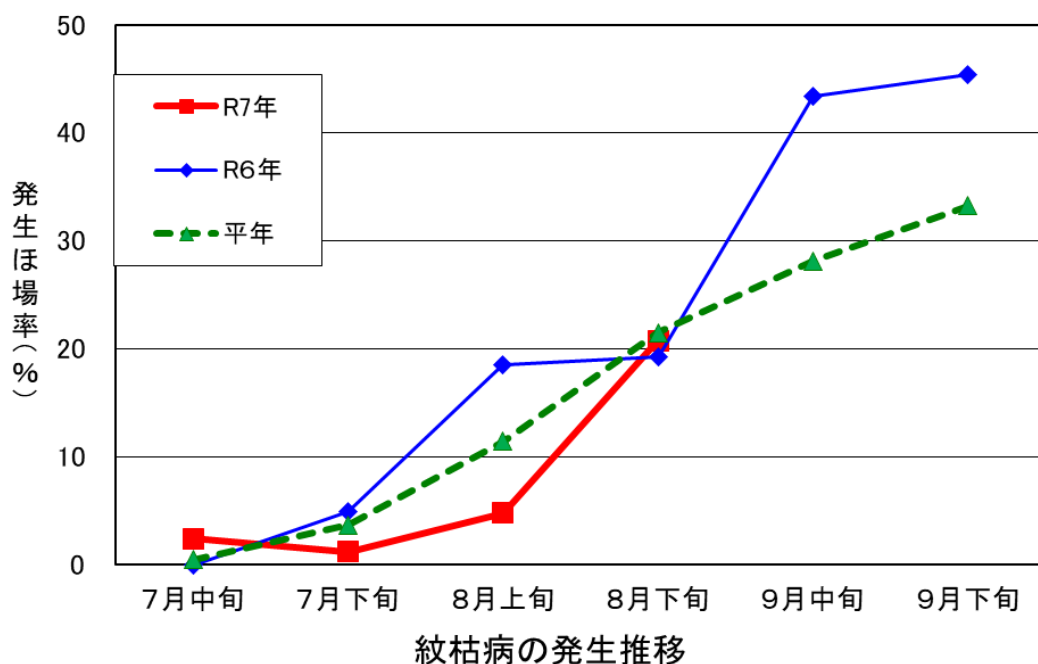
ア 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率20.7%（平年21.5%）、発病株率4.8%（平年3.3%）、発病度2.5（平年1.2）で平年並みであった（±）。

イ 気象予報では、9月の気温は高い、降水量はほぼ平年並（±）。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

多発した場合は、出穂期後2週間までに防除する。



3 トビイロウンカ

令和7年8月19日付け令和7年度農作物病虫害発生予察技術資料第4号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22318.html>

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	多発時

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%（平年26.2%）、10株当たり虫数0頭（平年30.7頭）、10株当たり短翅型成虫数0頭（平年0.4頭）で平年に比べ少なかった（－）。

イ 気象予報では、9月の気温は高い（＋）。

(3) 防除対策

<防除判断>

8月上旬に飛来があったため、10月以降に収穫する品種ではほ場をよく観察し、多発生が確認された場合は直ちに防除を実施する。なお、防除実施7日後に再確認し、必要に応じ再度防除を実施する。

<防除のポイント>

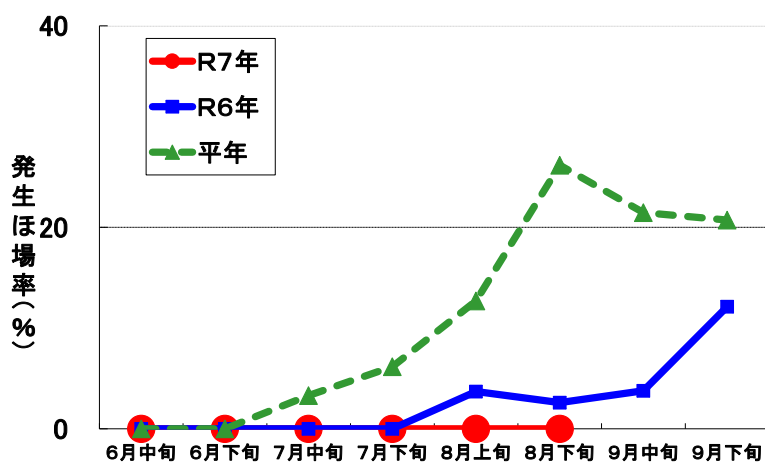
ア 直播栽培ほ場や本虫に効果の高い箱施用剤が使用されていないほ場では、発生状況をよく確認し、効果の高い薬剤により防除を的確に行う。

イ 薬剤は株元によくかかるように丁寧に散布する。

トビイロウンカ							JPPネット有効積算温度シミュレーション							
9月							10月							
飛来日	飛来量	5	10	15	20	25	30	5	10	15	20	25	30	
8月10日	多	第1世代幼虫		第1世代成虫		卵		第2世代幼虫		第2世代成虫				
		■: 防除適期											8月31日現在	

8月31日現在

トビイロウンカの防除適期予測図



トビイロウンカの発生推移(発生ほ場率)

4 コブノメイガ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	液剤：（中生品種対象）若齢幼虫最盛期

(2) 予報の根拠

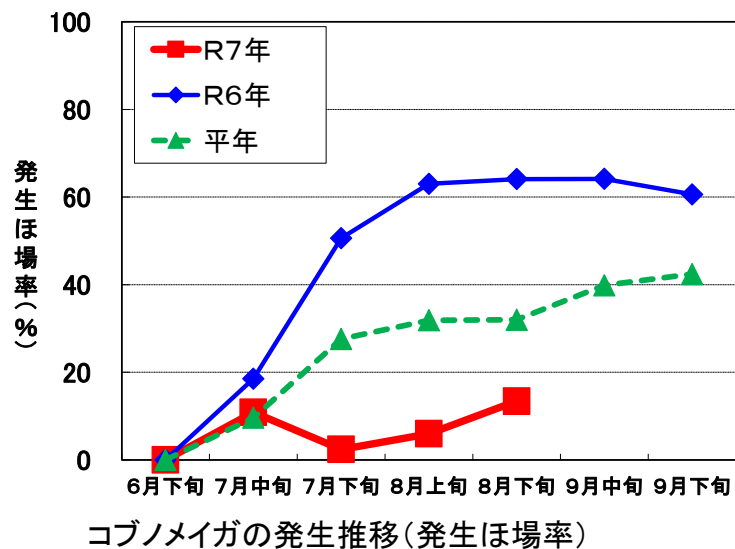
ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率13.4%（平年32.0%）、被害葉率0.0%（平年0.7%）、20回払い出し虫数0.1頭（平年1.2頭）で平年に比べやや少なかった（－）。

イ 気象予報では、9月の気温は高い（＋）。

(3) 防除対策

<防除判断>

出穂後は、水稻への産卵が少なくなるため防除は必要ない。



5 斑点米カメムシ類

令和7年8月6日付け令和7年度農作物病虫害発生予察注意報第2号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22328.html>

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	前年並	穂揃期と穂揃期後7日

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査(出穂ほ場)における20回すくい取り調査では、発生ほ場率61.1%(平年62.2%)、虫数4.0頭(平年2.3頭)で平年に比べ多かった(+)。

イ 7月26日～8月25日の予察灯(県内3か所)の誘殺数は、981頭(平年1,688頭)で平年並みであった(±)。

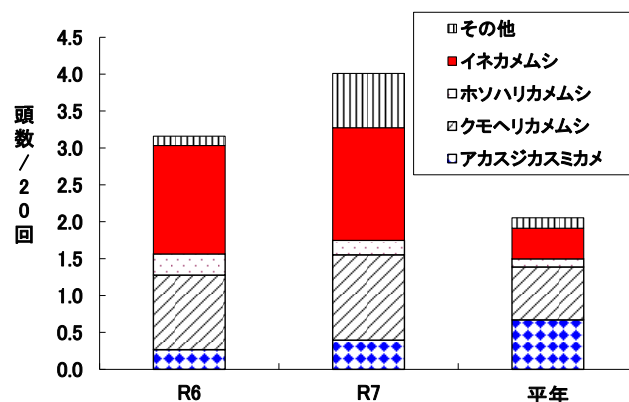
ウ 気象予報では、9月の気温は高い(+)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア すでに防除を実施したほ場においても、カメムシ類の発生が多い場合は追加防除を行う。

イ 防除時期に畦畔に出穂したイネ科雑草がある場合は、農薬の飛散に注意のうえ、畦畔も含めて防除を実施する。



出穂ほ場における斑点米カメムシ類のすくい取り虫数(8月下旬)

ダイズ

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	少	少	発生初期（若齢幼虫期）

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率9.5%（平年32.5%）、1a当たり白変か所数0.1か所（平年0.5か所）、1㎡当たり虫数は0.2頭（平年0.7頭）で平年に比べ少なかった（－）。

イ 7月21日～8月20日のフェロモントラップ（県内5か所）の誘殺数は3,802頭（平年4,457頭）で平年並みであった（±）。

ウ 気象予報では、9月の気温は高い（＋）。

(3) 防除対策

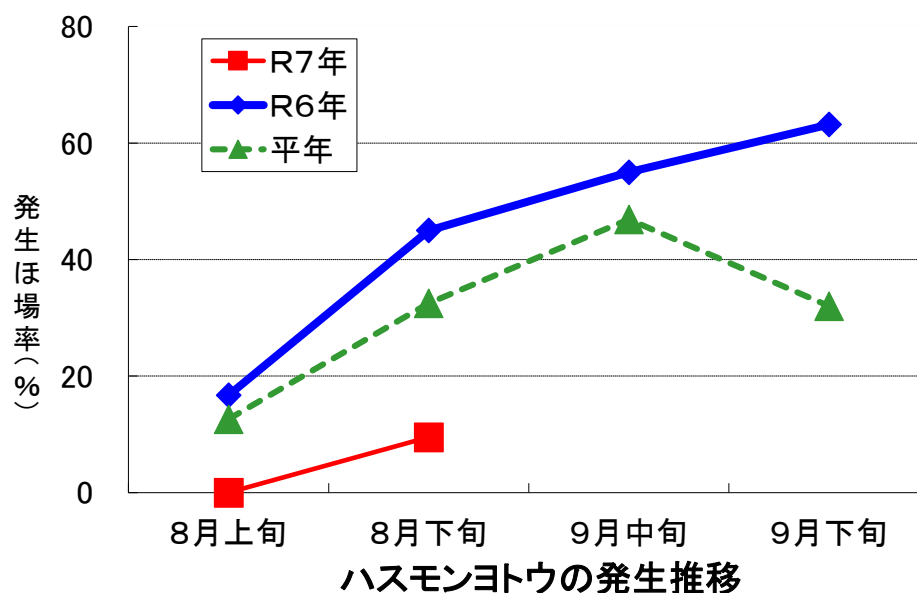
<防除判断>

防除の目安は、白変か所数が1a当たり5か所以上である。

<防除のポイント>

ア 発生量は地域やほ場によりばらつきがあることから、ほ場をよく観察し、防除適期（若齢幼虫最盛期）に薬剤防除を実施する。

イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。



2 吸実性カメムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	前年並	莢伸長期（開花期後30日頃）と子実肥大期（開花期後45日頃）

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率52.4%（平年43.7%）、1㎡当たり虫数0.3頭（平年0.3頭）で平年に比べやや多かった（+）。

イ 7月26日～8月25日の予察灯（県内3か所）の誘殺数は51頭（平年58頭）で平年並みであった（±）。

ウ 気象予報では、9月の気温は高い（+）。

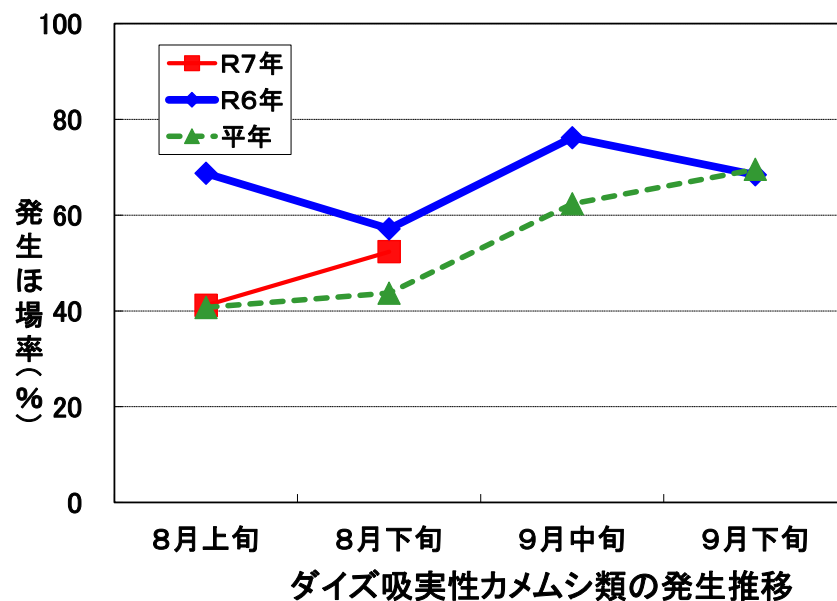
(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 開花期は各ほ場の品種や生育状況によって異なるので、開花期を十分確認のうえ、カメムシの発生状況を確認し、防除を実施する。

イ 薬剤散布後にも発生が認められる場合は、追加防除を実施する。

ウ 防除の際はダイズの莢に薬剤が十分かかるよう散布する。



カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	台風の前

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率21.1%(平成8.2%)、発病果率1.9%(平成0.9%)、発病度0.6(平成0.4)で平成に比べ多かった(+)。

イ 気象予報では、9月の降水量はほぼ平成並(±)。

(3) 防除対策

<防除判断>

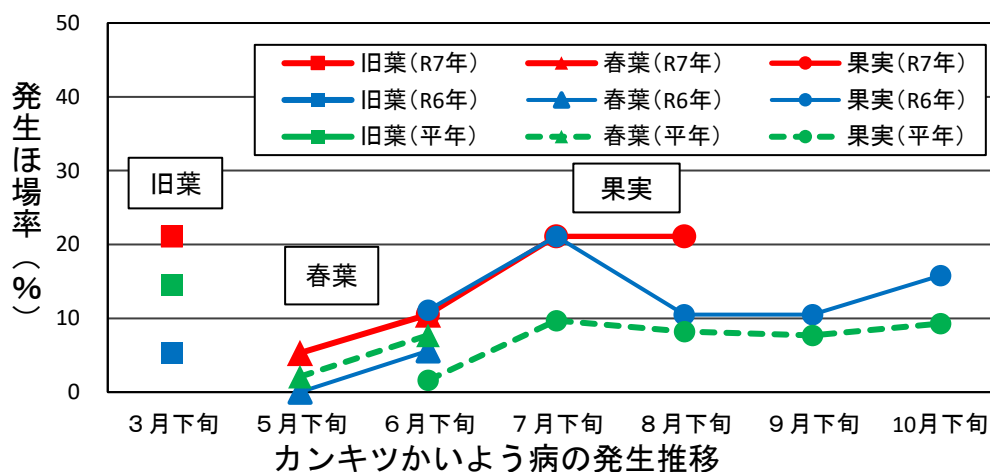
発生が見られるほ場や、あまなつ、南津海等発病しやすい品種では、台風の襲来前に防除を実施する。

<防除のポイント>

ア 病斑のある枝や葉は伝染源となるので除去する。

イ 防風樹や防風ネットを整備し、強風による感染を防ぐ。

ウ 夏秋梢はミカンハモグリガの被害が発生しやすく、本病の発生を助長するので、できる限り除去する。幼木や隔年交互結実園の遊休樹など夏秋梢を残す場合にはミカンハモグリガの防除を徹底する。



2 黒点病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平成比	前年比	
平成並	平成並	前年並	防除後の累積降水量が200mmに達したとき、 または、薬剤散布後1か月を経過したとき

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率63.2%(平成66.0%)、発病果率17.7%(平成15.4%)、発病度5.3(平成4.0)で平成並みであった(±)。

イ 気象予報では、9月の降水量はほぼ平成並(±)。

(3) 防除対策

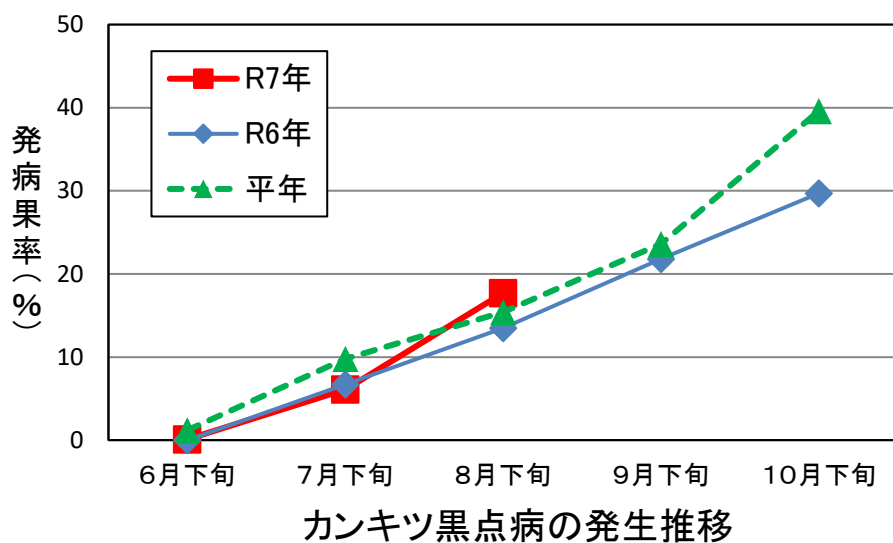
<防除判断>

予防散布が基本なので、上記防除時期に合わせて防除を実施する。

<防除のポイント>

ア 樹冠内の枯れ枝や放置されたせん定枝は本病の伝染源となるので、園外に持ち出して処分する。

イ 「せとみ」の黒点病は病斑が大きくなり、外観品質に及ぼす影響が大きいため、防除が遅れないように留意する。



3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	雌成虫の寄生葉率30～40%以上 または雌成虫1葉当たり0.5～1頭以上

(2) 予報の根拠

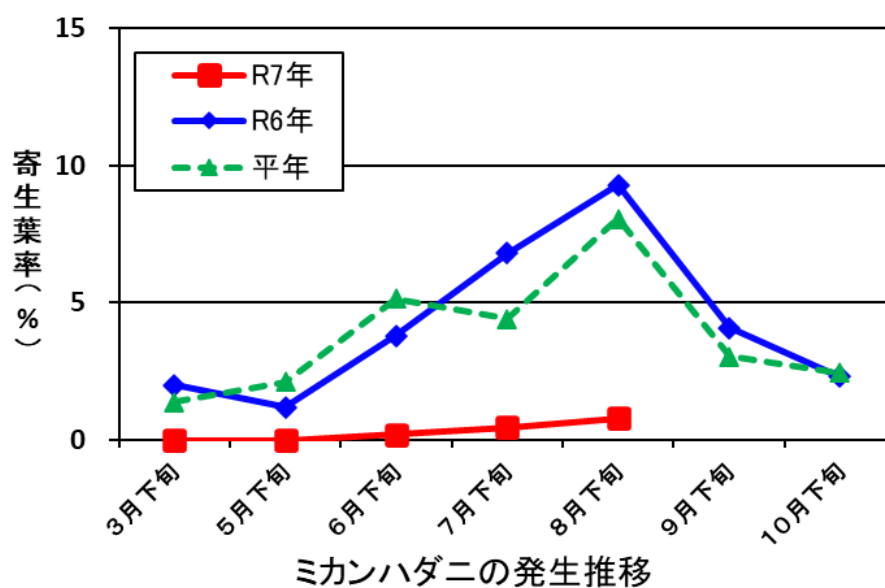
ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率21.1% (平年35.7%)、寄生葉率0.8% (平年8.1%) で平年に比べ少なかった (ー)。

イ 気象予報では、9月の気温は高い、降水量はほぼ平年並 (±)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

発生量はほ場によって大きく異なる。定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。



果樹全般（カンキツ、ナシ、リンゴ）

1 カメムシ類（クサギカメムシ、チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	園地への飛来を確認した時

(2) 予報の根拠

ア 7月26日～8月25日の予察灯（県内4か所）における誘殺数は126頭（平年581頭）で平年に比べ少なかった（－）。

イ 7月26日～8月25日のフェロモントラップ（県内3か所）によるチャバネアオカメムシの誘殺数は3頭（平年3,638頭）で平年に比べ少なかった（－）。

(3) 防除対策

<防除判断>

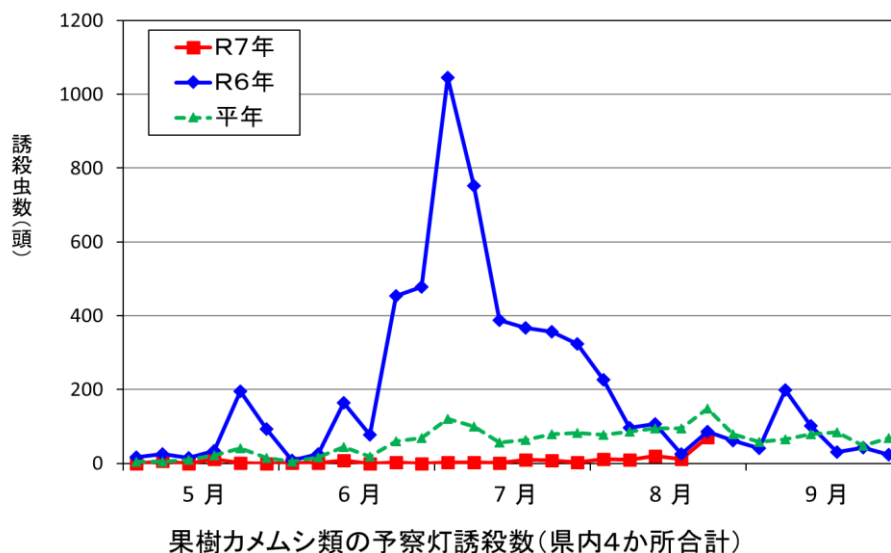
果樹カメムシ類の飛来時期や量は、地域や園地による差が大きいため、活動が活発になる夕方に園地や灯火を定期的に確認し、カメムシ類の飛来を把握する。

<防除のポイント>

ア 無袋栽培園では、飛来を確認したら速やかに薬剤散布を行う。

イ 有袋栽培であっても、果実の肥大に伴い袋に接して加害されやすくなるため、飛来を確認したら薬剤散布を行う。

ウ カメムシ類に対する薬剤散布によって、ハダニが増殖する場合があるため、発生状況に注意する。



野菜全般

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発生初期（若齢幼虫期）

(2) 予報の根拠

ア 7月21日～8月20日のフェロモントラップ(県内5か所)の誘殺数は3,802頭(平年4,457頭)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、9月の気温は高い、降水量はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

<防除判断>

野菜では、苗床や定植直後に加害されると被害が大きいのので、こまめに発生状況を確認する。

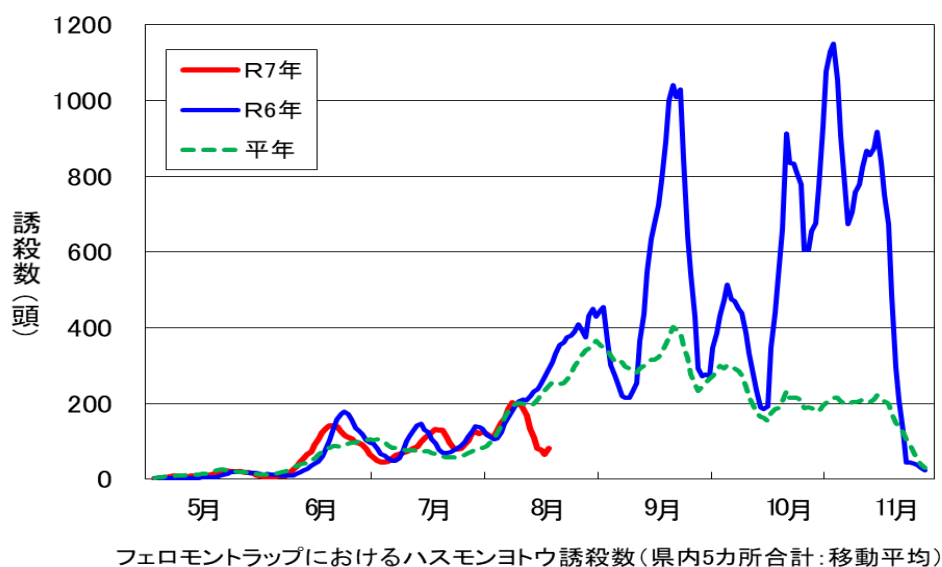
<防除のポイント>

ア 卵塊や若齢幼虫が集団で食害している葉を探し、捕殺する。

イ イチゴ等の施設栽培では、鉄骨パイプや天井ビニール等に産卵することが多いので、黄褐色の毛に覆われた卵塊を見つけたら直ちに捕殺する。

ウ 若齢幼虫期の防除を徹底する。

エ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。



【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想 発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イネ	ごま葉枯病	多	多	多	42.7	22.5	穂いもちとの同時防除を行う。
	ツマグロヨコバイ	平年並	平年並	前年並	7.3	14.9	
野菜全般	コガネムシ類	平年並	平年並	多	—	—	県内3か所の予察灯における誘殺数(7/26～8/25)は258頭(平年249頭)であった。

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並	平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少	平年並の外側20%の度数の入る幅
少	やや少ないの外側10%の度数の入る幅

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	前年の評価より少ない発生
前年並	前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	より6日以上遅い
やや早い	より3～5日早い
やや遅い	より3～5日遅い
平年並	を中心として前後2日以内

注：ウンカ類は1971年以降、コブノメイガは1985年以降の初確認日と比較

（ウンカは旬毎、コブノメイガは半旬毎）

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1 か月気象予報（8月28日福岡管区气象台発表）

予 報	低 い (%) 少ない	平年並 (%)	高 い (%) 多い
気 温	1 0	1 0	8 0
降 水 量	3 0	4 0	3 0
日照時間	2 0	4 0	4 0

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	1 0	1 0	8 0
2 週 目	1 0	1 0	8 0
3～4 週 目	1 0	3 0	6 0